

O E U
V R E

Graduation Works Exhibitions

第57回卒業制作展作品集 [ウーヴラ]

Tohoku Seikatsu Bunka University Department of Art

2024



O E U V R E

Graduation Works Exhibitions

第57回卒業制作展作品集 [ウーヴラ]

Tohoku Seikatsu Bunka University Department of Art

2024

東北生活文化大学 美術学部 美術表現学科
第57回卒業制作展作品集

02-23

Works

卒業制作展作品集

●

26-31

Interviews

学生インタビュー

●

32-33

Talk

教員対談

●

34-37

Message

佐藤一郎学長メッセージ

●

38-39

Laboratories

研究室紹介

ひかりがさして

藤平みのり Fujihira Minori





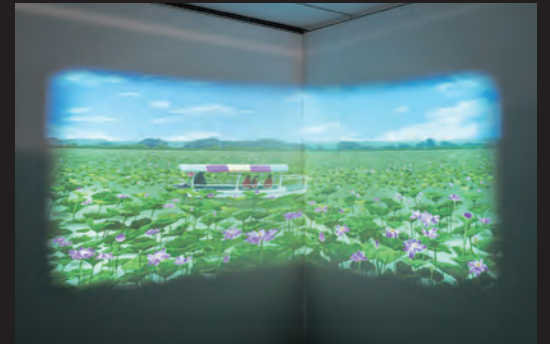




沼る

～見て聞いて知る伊豆沼・内沼の魅力～

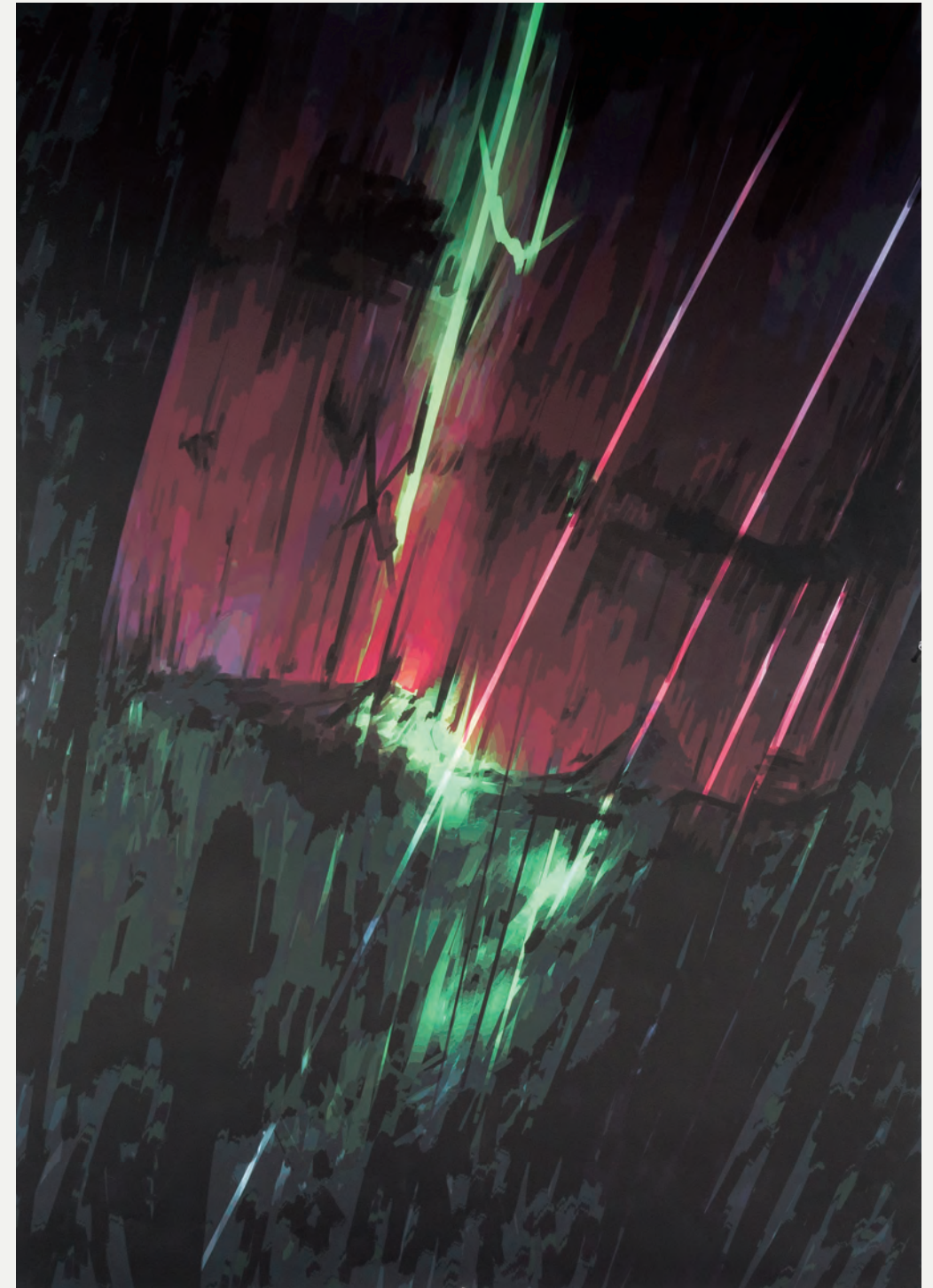
北原莉子 Kitahara Riko



洋画 逆不道地獄変
齋藤 拓 Saito Taku



洋画 Fentorcade
武田竜青 Takeda Ryusei





洋画 鱈よ、メタモルフォーゼ
 一條美結 Ichijo Miyu



情報デザイン Cookjoy ~世界のお菓子とレシピを学べるアプリ~
 岩間彩乃 Iwama Ayano





情報デザイン
推し活Lab
相澤まどか Aizawa Madoka



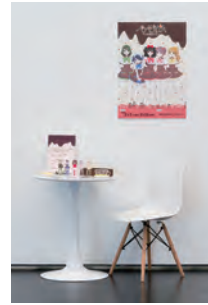
インフォグラフィックス
パネル(5枚):59.4×84.1cm

視覚デザイン
haute couture
石川遥渚 Ishikawa Haruna



イラストレーション
パネル 42×29.7cm

視覚デザイン
ペンタプリズム~コラポカフェ~
伊藤翠香 Itou Midorika



デジタルイラスト
アクリルスタンド 12×3cm/アクリルキーホルダー
9×9cm/ポスター B2

洋画
リンカーネーション
金井美柚 Kanai Miyu



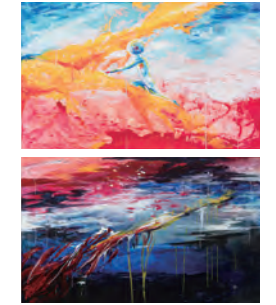
アクリル画
72.7×91cm

ガラスアート
幻影
甲田桂子 Kouda Keiko



バーナーワーク
ガラスの金魚:約4×4×7cm

日本画
寒暖差
佐々木大晴 Sasaki Taisei



たらし込み
130.3×80.3cm 2枚

アニメ・ゲーム
BANDAGE
稲毛 睦 Inake Makoto



アニメーション
2分03秒
203.7×114.6cm(プロジェクションサイズ)

洋画
十猫十色/十猫十色~個性~
大関真由子 Ozeki Mayuko



油絵
十猫十色 162cm×130.3cm
十猫十色~個性~ 約76.5cm×約105.5cm

アニメ・ゲーム
中華町の日常
押切優海 Oshikiri Yua



アニメーション
1分01秒
181.8×227.3cm(プロジェクションサイズ)

マンガ・イラスト
遥か彼方、月の向こう
佐々木麻友 Sasaki Mayu



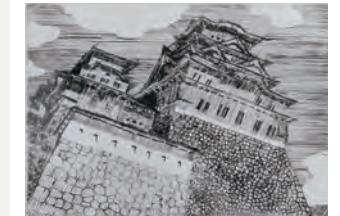
イラストレーション、アニメーション
漫画(平面):約70×約660cm

視覚デザイン
ちめみる
佐藤朱莉 Sato Akari



手芸
大ぬいぐるみ1:22×12×14 / 2:11×12×12cm
小ぬいぐるみ1:9.8×6×6 / 2:12.6×6×6cm

版画
姫路城
志賀野礼央 Shigano Reo



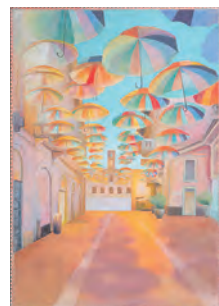
ビュラン、エッチング
30×30cm

洋画
思い出
小幡希美子 Obata kimiko



アクリル画
絵画:53×41cm

洋画
旅
鹿岩咲来 Kaiwa Sakura



ぼかし
204×140cm

情報デザイン
はなあつめ
影山玲菜 Kageyama Rena



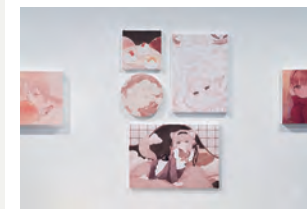
アプリケーションデモ
映像作品:14.76cm×7.16cm(スマートフォン)

マンガ・イラスト
Selenophilia
菅原彩桜 Sugawara Sakura



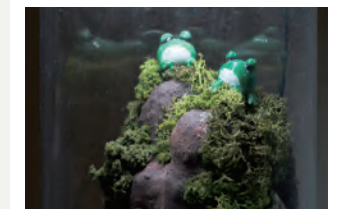
イラストレーション
スチレンボード:29.7×21cm

マンガ・イラスト
Dream Palette
菅原美穂乃 Sugawara Mihono



イラストレーション
絵画:257×364, 297×420, 180×180, 200×
200(3個)、250×250(4個)

ガラスアート
かわずの集落
高橋佑京 Takahashi Ukyo



ガラスアート
30×15×15=3個/ 20×10×10=2個

漆芸
春秋
武田悠那 Takeda Yuna



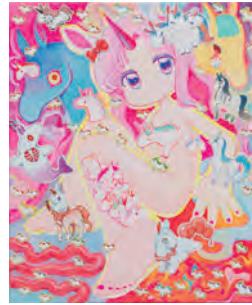
乾漆、彫漆
作品A: H25.5×W29.0×D20.0cm
作品B: H29.5×W23.0×D20.0cm

情報デザイン
Looks more delicious!
より魅力的に、美味しそうに見える
学食のデジタルサイネージ
田子響己 Tago Hibiki



グラフィックデザイン
モニター: 23.8インチ

洋画
decoration
多田陽南 Tada Minami



アクリル画
絵画: 60.6×50 / 20×20cm

陶芸
光華
野尻晴香 Nojiri Haruka



ろくろ、タタラ作り
イラスト: 36.4×51.5(×4) | 皿: 3.5×20×20 / 2.5×16×16など

染織
ヒカリノナカ
日野花菜 Hino Kana



ノッティング、綴織
180×72cm/2枚

アニメ・ゲーム
折り
村上 萌 Murakami Moe



アニメーション
2分01秒
190×230cm(プロジェクションサイズ)

視覚デザイン
オオスズメバチのレプリカ
田村珠莉 Tamura Syuri



スタイロフォーム/石膏/アクリル絵の具
18×47×60cm

日本画
Halo
附田彩幸 Tsukuta Sayuki



日本画/水彩画/イラスト
116.7×91/116.7×91/72.7×60.6/72.7×60.6/
53×45.5/53×45.5/53×45.5/53×45.5cm

ガラスアート
Insect
鄭 瑀琦 Tei uti



ガラス細工
蜻蛉4×5×7 // ハチ5×3×4 / さそり5×4×5 / カマキリ6×4×4 / 花カマキリ4×3×3cmなど

視覚デザイン
Unknown bird
山田かおり Yamada Kaori



イラストレーション
ポスター: 72.8×51.5×2 / 冊子: 2冊 21×14.8 / チケット: 2枚 19×6.8cm

視覚デザイン
one off
民族衣装服飾専門店の月ごとのスヌメ
吉田遥 Yoshida Haruka



イラストレーション
冊子: 30.6×25.5cm

洋画
MY MEMORIES
尹ハヌル Youn haneul



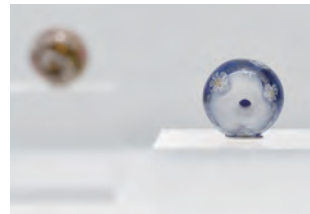
アクリル画
H23.0×W27.0cm

日本画
回る廻る
中條理央 Nakajo Rio



水干絵具/岩絵具
日本画: 100×100/45.5×45.5cm

ガラスアート
サンカヨウ
中山あゆ Nakayama Ayu



バーナーワーク
2.5×2.5×2.5cm

洋画
自開
西村七海 Nanami Nishimura



カマイユ技法
162×130.3cm

洋画
肉のユーエンミー、愛憎と
白倉向日葵 Shirakura Hinata
[研究生]



ミクストメディア
H194×W162cm





多様な学びと実践を通して成長できた

吉田 遥さん Yoshida Haruka

岩手県 盛岡第二高等学校出身 | 視覚デザイン専攻



授業をきっかけに異文化に関心

視覚デザインを専攻する吉田さんは卒業制作で、世界各地の民族衣装をモチーフとしたオリジナルの衣装をデザインしています。架空の服飾専門店のおすすめコーディネートというコンセプトで、さまざまな民族衣装の特徴を反映した衣服・アクセサリー・小物・帽子や靴などのイラストを月ごとに12ヶ月分、それぞれA3サイズの

パネルに描いて提示します。

もともと衣服やアクセサリーなどのデザインを考えて描くのが好きだったという吉田さんが世界各地の民族衣装に着目したのは、大学のマンガの授業がきっかけでした。「民族衣装のイラストを描く課題があり資料を調べていくうちに、今までの私には考えられない色使いやデザインに興味を引かれました。手縫いによる幾何学的な模様や、顔や体の入れ墨など、それぞれの地域の文化が服飾に表れているのが面白いです」と吉田さんは話します。

卒業制作では、入れ墨の模様をアームカバーの柄にしたり、肌の露出の多い民族衣装をワンピース風にアレンジしたりして、現代の日本でも身につけられるようなデザインに仕上げています。

多方面で 学びと実践を重ねた

高校時代に美術部で絵画を中心に制作していた吉田さんは大学入学後、テーマやモチーフを単純化して平面上に表現するような作品に多く取り組み、美術表現学科で開催するコンクールや仙台のギャラリー

が主催する公募展に出品するなど、精力的に制作・発表してきました。また染織、漆芸、彫刻などの授業で各分野の技法や考え方を学びつつ、

所属する漆芸サークルでも本格的に制作活動を続けてきました。

さらに、吉田さんは教員免許と学芸員資格を取得する課程を履修中です。学芸員資格取得のために岩手県立美術館で行った実習について「展示作品のことをお客さんに説明するために、作品のテーマや技法だけでなく、作家の作風の変化、作品ができた背景などを調べて理解を深める経験ができた」と話すなど、吉田さんは4年間に取り組んだ授業、制作、実習など各方面での実践を自身の成長につなげてきました。

「まずはやってみる、ということを大事にしてみました。そのおかげで、知らなかった世界に気づけたし、苦手なことを克服できたと思います」

楽しくなったものづくりが進路に

大学でイラストや視覚デザインを中心に制作してきた吉田さんですが、就職活動ではものづくりに関わる仕事を探しました。ものづくりを志したきっかけについて「以前は工作のような作業が苦手でした。木で何かを作ってもガタガタになって



しまったりして、楽しくないな、って。でもプロダクトデザインの授業でイスを作ったとき、基本的な道具の使い方や作業手順をしっかりと踏まえれば私でも完成度の高いものを作れる、と感じ、面白いと思うようになりました」と話す吉田さん。卒業後は家具メーカーに就職し、木製のイスなどの製造に携わることが決まっています。「プロの現場で知識や技術を吸収できるのが楽しみ」と今後への期待を話してくれました。

新たな技法を身に付け、 表現の方向性を見出した

藤平みのりさん Fujihira Minori

宮城県 宮城野高等学校出身 | 陶芸専攻



多様な学びを経て、陶芸を選んだ

藤平さんは高校の美術科で陶芸に取り組んでいましたが、この大学の卒業生である作家の版画作品の色使いに憧れ、同じ場所で版画を学びたいと入学しました。しかし大学で版画のほかには絵画、彫刻、陶芸などさまざまな授業で制作を経験し、陶芸作品の制作を続けるという選択をしました。

「平面より立体が好き、削ぎ落としていく作業よりも付け加えて行く作業が得意、など、授業を通して自分自身の好みや適性が明確になった」と藤平さん。さらに陶芸の授業で新たな技法や素材を知ったことが、陶芸への制作意欲につながりました。「それまでは紐作り^①で制作していたのですが、大学で鑄込み成形^②という技法を学びました。さらに、化粧泥^③と下絵の具を混色する独自の手法を取り入れました。もともと版画で色使いを重視した制作をしたいと思っていたのですが、鑄込み成形と化粧泥での彩色法を知り、さまざまな色を使った陶芸作品で表現していきたいと思うようになりました」

陶芸のイメージを変えたい

藤平さんは、うつわなどの実用品ではなく置物のような焼き物を多く制作してきました。化粧泥や絵の具を用いた彩り豊かな表現が特徴です。藤平さんは自身のこのような方向性について「陶芸というと渋い色合いのうつわ、というイメージをもつ人が多いように感じますが、私はそのイメージを変えたいと思っています」と話します。

卒業制作では、女性の横顔を描いた5枚の絵画と、ふくらみとくびれが印象的な焼き物15個を

組み合わせた作品を制作しています。「絵に描いた女性をこの世界に引き出したらこうなる、ということ焼き物で表現しようとしています。絵画も焼き物も、女性の曲線の美しさを感じられるような仕上がりを目指しています」と藤平さん。特に焼き物の色については、あたたかい空気をまとったような発色になるように化粧泥での彩色を繰り返し追求しています。

卒業後も色を扱う仕事に

藤平さんは建造物や美術品など文化財の修理・修復を手掛ける会社への就職が決まっています。3年生の時に先生の声がけで文化財の修復現場に見学に行ったことがきっかけでした。面接試験では自身のポートフォリオを持参した藤平さん。「陶芸作品に化粧泥を塗るときにムラがないようにするなど、すべての作品制作において丁寧な作業を心がけてきました。面接をしてくださった方にもそれが伝わったのかな、と思います」と振り返ります。



- ① 粘土を紐状にし、積み上げていく技法
- ② いこみ。石膏型に粘土を流し込んで成形する技法。同じ形の作品を複数作ることができる。
- ③ 着色するための泥状の粘土。

就職先では美術作品などの色を修復する彩色部門に配属されることが決まったそうです。

「今までも色にこだわった制作を続けてきたのでうれしいです。古い美術作品が作られた意味や背景などを勉強して作品の価値をしっかりと理解し、作られた当時の鮮やかな状態を丁寧に再現することで、見る人に感動を伝えられるような仕事をしていきたいです」

描く意味を問いながら、 自分の絵に向き合い続けた

伊藤好生さん Ito Yoshio

岩手県 花巻南高等学校出身 | 洋画専攻



自分の表現に合う モチーフに行き着いた

岩手県の高校の美術部で油絵を始めた伊藤さんは大学でも油絵を中心に描き、特に風景画での表現を続けてきました。「見た人が『きれい』と感じるだけの風景画なら、わざわざ描く意味がないのでは、という考えがずっと自分の中にあって、見た人の頭にその人なりの解釈が生まれ

るような絵を描こうとしてきました」と話す伊藤さん。風景を構成する要素を抽出して自分なりに画面に再構築する試みを続ける中で、自分がしたい表現に最も合う題材として「道」に主眼を置いて描くようになりました。

「東日本大震災の被災地にも、コロナ禍で人の動きが制限されても、道を通って物が届き、私たちは生きていけた。絵を見てくれた人にとって、道を生命線にした私たちの生活のあり方を思うきっかけになったらと思います」と伊藤さん。卒業制作でも「道」をテーマに、幅約5mにもおよぶ油絵を描いています。

大学での学びを通じた成長

大学に進学した当初、絵を描く意味を見失いがちだったという伊藤さん。「高校時代は大学受験を目標に絵の練習をしていたけど、大学に入って『自分の絵って何だろう』と考えたら何も浮かびませんでした」と当時を振り返ります。2年生の時の洋画の授業で迷いながら描いた風景画に先生が「これで行け」と声をかけてくれたことがきっかけで、伊藤さんは風景画を通じて自身の

表現を考えていこうと決めました。3年生のときに「道」を描き始め、仲間と企画したグループ展などで作品を発表してきました。描くことと見て

もらうことを重ねつつ、自身の絵と向き合い思考を深めてきた伊藤さん。「風景画を通じた自分の表現や、道に注目している理由について、以前より言語化して伝えられるようになった」と感じています。

また伊藤さんは大学の授業で彫刻、陶芸、版画、染織など絵画以外の分野を学んだことが自分にとってプラスになったと話します。「特に彫刻や陶芸の授業で立体を手で感じながら表現する感覚は、絵を描いているだけでは得られなかったものです。それを経験したことで、絵の具の盛り方や刷毛の立体感などを以前より意識するようになり、絵画表現の幅が広がったと思います」

人生を通じて美術に関わっていきたい

大学卒業後の進路について「絵を仕事にしていきたい」と伊藤さん。「美術には人間の本質が現れるような気がします。言葉で伝えられないことが絵なら伝わることもあるし、描いた絵に自分の人間性が浮き上がることもある。だから、人生を通して美術に関わっていけたら面白いな、と思っています」と話します。卒業



と同時に教員免許を取得予定なので、美術教育に携わりながら自身の制作を続けるという方向性も視野に入れています。

「お金では計れない人の豊かさが芸術によって育まれることがあると思っています。作家でも学校の先生でも、自分が美術を続けていくことで、人の豊かさを育てていくような大きな文脈の一人になれたらうれしいですね」

“ 分野を横断した学びが 新たな表現につながる ”



立花布美子

准教授

Fumiko Tachibana

Associate Professor

陶芸研究室

落合里麻

准教授

Rima Ochiai

Associate Professor

立体デザイン研究室

2024年10月のある日、4年生のクラスを担当する2人の教員が、
大学での学びと表現活動を通じた学生の成長や、卒業生への期待などについて語り合いました。

Q1

美術を学びたい若者にとって、
貴学を選ぶメリットは何ですか。

立花: 絵画なら絵画、彫刻なら彫刻、のように特定の分野だけを学ぶのではなく、1・2年生の時にいろいろな美術分野を学ぶことができるのが本学の特徴です。さまざまな技法や素材、考え方を経験したからこそ自分が本当にやりたい表現を見つけることができた、という学生が多いと思います。

落合: そうですね。さまざまな美術分野の作品制作に取り組み、自分自身と対話しながら方向性を模索できる環境が本学にはあると思います。だからこそ学生には、苦手な分野の制作も全力で取り組んでほしいと思っています。そうすることで初めて、自分に向いているか向いていないか、という発見ができるのだと思います。

立花: それから、さまざまな美術分野を学ぶことは、方向性に迷っている学生だけでなく、追求したい分野が決まっている学生にとってもプラスになっていると思います。作品制作をするときに、彫刻で学んだ技法を用いて陶芸作品として焼き上げたり、陶芸と絵画を組み合わせた空間表現を試みたりと、複数の分野を融合させることで飛躍したアイデアが生まれることが多いと感じています。

落合: 別の分野で学んだ内容や経験を自身の作品制作に生かしている学生は多いですね。私が担当するプロダクトデザインの授業で立体物を作るとき、壊れない物を完成させるためにしっかり計画を立てて段階を踏んで進めていくことが大事だと伝えているのですが、授業を受けた学生が他分野の作品制作においてもその考え方を大切にして丁寧に制作を進めている姿を見るとうれしくなります。

Q2

貴学の学生さんは、学外での作品発表や展示にも積極的な印象です。

立花: 陶芸専攻の学生たちは2023年から「仙台・杜の都のクラフトフェア」で展示販売をしていて、店づくりの準備や当日の対応など、自分たちで運営を考える機会に

なっています。また販売に向けてお客さんが欲しいもの
を考えることで、制作するうえでの新たな気づきを得る
こともあります。

落合: 陶芸も、プロダクトデザインも、使う人の存在を意識
することが大切な分野です。だから作ったものを外部の
人に見てもらって反応を感じられる機会は貴重ですね。
学部全体で言うと、毎年、大衡村ふるさと美術館で学生
の作品を選抜して展示しています。この展示は学生に
とって制作活動の励みになっていますし、地域の人に学
生の活動を感じてもらう機会としても意味があると思っ
ています。

立花: 学外での展示の際には残念ながら展示作品に選ば
れずにつかりする学生もいるのですが、選ばれた作品の
良い点に気づいて自分に何が足りないか考えることが、次
の制作に向けた意欲につながっていると思います。

Q3

貴学の卒業生はどのように活躍していますか。

立花: 陶芸専攻に関して言えば、多くの卒業生がさまざま
な形で陶芸に関わっており、お互いにつながっている印
象です。県内で作家活動をしている先輩の存在は学生に
とって心強いですね。これから卒業していく学生たちも
何かの形で陶芸に関わり続けて、ネットワークを広げて
いってほしいです。

落合: 中学校や高校で美術の先生になっている卒業生も
多いですね。本学の卒業生は学生時代にいろいろな美
術分野を学び、自身と対話しながら進むべき道を模索し
てきた人が多いと思うので、作品制作について、進路選
択について、子どもたちに広い視野で助言できる存在に
なっていると思います。

立花: そうですね。学生時代にいろいろな美術分野を学ん
で、作る楽しさ、表現する楽しさをたくさん経験している
から、それを伝える役割も果たしてくれているのではない
でしょうか。

ありがとうございました。貴学で学んだ皆さんの今後の
ご活躍がますます楽しみになりました。

“ 「描くこと」を通して
これからの世界を生き抜くために
みずからの「物の見方」を
鍛えてほしい ”



佐藤一郎「調色板と電熱器」部分 | 金沢美術工芸大学蔵 | 1976-77年 | 60.0×50.0cm
パーティクルボード/厚綿布/白亜地/卵テンペラ絵具/油性テンペラ絵具/樹脂油絵具 | 金沢美術工芸大学蔵

レオナルド・ダ・ヴィンチが語る 絵画論

レオナルド・ダ・ヴィンチ『絵画の書』を読んでみると、「どのような科学が手仕事のであり、どれが手仕事のではないのか」という題目の、次のような彼の文章があります。

「……だがわたしは、あらゆる確実さの母である経験から生まれ、明らかな経験で終わらないような科学、つまり、始めか、中間か、終わりかが、五感のいずれかを通過しないような科学は、空虚で誤りに満ちているように思われる。……

……絵画の持つ真の科学的な原理は、まず物体とは何か、始源影や派生影とは何で、明るさとは何か、すなわち闇、光、色、物体、形姿、場所、遠さ、近さ、運動と静止とは何か、として提示されるが、これらは手作業なしに、精神によってのみ理解される。これが絵画という科学である。それはその考察者たちの精神に宿り、ついでそこから手作業によって絵画が制作されるが、それは前述の考察や科学よりもはるかに優れたものとなる。」

ここでいう考察者とは、「見ること」と「描くこと」交互に繰り返す画家の行為を指し示しているように思われる。レオナルドがいう「絵画は科学である」とはなにか。すなわち、光が差し込むと物体に陰影が見えてくる。そして、明部が見える。光源と反対側にできる物体の陰(始原影)や、物体の形態が他の物体に投影される影(派生影)が見える。つまり、明部と暗部とはなにか。物体の形と姿(形姿)と、それを取り囲む空間と場所とはなにか。物体までの距離(遠さ、近さ)はどのくらいか。物体には、動きがあるのかないのか(運動と静止)。画家は、このような絵画の科学を理解することができる。しかも、このような科学を制作によって探求でき、さらに優れた絵画が生まれる。

このように、レオナルド・ダ・ヴィンチは、見ること、描くことの連関の重要性を主張している。



佐藤一郎「石膏素描モリエール」部分
1966年 | 65.0×50.0cm | MBM木炭紙/木炭



佐藤一郎「焼山遠望」部分
2002年 | 130.3×162cm | 麻布/白亜地/墨汁/卵テンペラ絵具/油絵具
妙高市蔵

「グローバルな地球社会」と「ローカルな地域社会」

「グローバルな地球社会」が進展するにしたがって、ICT(情報通信技術)や、AI(人工知能)環境が整ってくると、人間の生活と文化は一様化、均一化の方向に向かうかもしれません。その結果、国、地域ごとに培われてきた伝承のおよび伝統的な生活と文化、いわば「ローカルな地域社会」がそれぞれの個性を失い、個人一人ひとりの違いがなくなってくるように思えます。

そのような世界では、なおのこと目と手と脳が一体化する「描くこと」、その土台にある「見ること」が、個人一人ひとりにとって重要になります。そのような行為が合わさると、「ローカルな地域社会」の特性が現れ、活性化していきます。

もともと、「見ること」「描くこと」の連関によって、レオナ

ルド・ダ・ヴィンチの時代に、明暗法、遠近法は確立され、そのリアルに現実を実証する見方は、ルネッサンスから、近代をへて、現代に至るまでの科学技術を発展させる原動力となってきました。

通常、絵で表現するというと、三次元の物体と空間を二次元の平面に自らの目でリアルに再現する写実主義絵画(リアリズム)を指すが、二次元の素描や画像や映像を二次元の画面に写すことも表現という。さらには、自己の内面世界を可視化することも、抽象表現主義(アンフォルメル)、超現実主義絵画(シュールリアリズム)とかいって、20世紀に誕生してきました。

これら三つの表現が組み合って一人ひとりの表現が生み出されてくるのでしょう。一人ひとり個性とそれらの多様性が形作られてくるのでしょう。



佐藤一郎「青葉」| 1984年 | 90.0×124.5cm | 木板/薄綿布/白亜地/卵テンペラ絵具/油絵具 | 大崎市民ギャラリー 結絶の館蔵

自己を高められる教育環境

東北生活文化大学の環境は素晴らしく、四季折々、さまざまな樹木、草花が観察できます。自分自身の美意識を涵養し、四年間、美術を实践できる幸せに恵まれています。本学では、一年次に「見ること」「描くこと」を基本に据え、そして、各分野のスペシャリストである教員によって、ベーシックなスキルが学べます。

三年次からは、美術・工芸(洋画、日本画、彫刻、陶芸、漆芸、染織)とデザイン・メディア芸術(視覚デザイン、情報デザイン、プロダクトデザイン、マンガ、アニメーション、コンテンツデザイン)とするコースを選択していきます。いずれのコースも、現代では複合的、相互浸透せざるをえず、一人ひとりに即した柔軟な対応を心がけています。

そのため、美術表現学科の教員、副手のみなさんは、学生たちの立ち位置に降り立ち、よく話を聞き、それぞれの学生の制作活動と、人間としての成長を、常に見守っています。

東北の「ローカルな地域社会」の文化芸術の基盤を作り出そうと、美術を学び、作り、発表するというあらゆる教育研究環境を理想的な形態に近づこう努力しています。



佐藤一郎「丹羽悠乃像」部分
2024年 | 26×18cm | 粗目アルシユ水彩紙/鉛筆/水彩絵具



佐藤一郎・プロフィール

1946年宮城県古川市(現:大崎市)生まれ、仙台市で育つ。1970年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。1973年西ドイツ政府給費留学生として、ハンブルグ美術大学に在学。帰国後、東京藝術大学(油画技法材料研究室)講師、助教授、教授をへて、2014年東京藝術大学名誉教授、金沢美術工芸大学大学院専任教授。2019年東北生活文化大学学長。

書籍:1980年『マックス・デルナー:絵画技術体系』翻訳出版(美術出版社)。1993年『クルト・ヴェーデル:絵画技術全書』翻訳出版(美術出版社)。2004年『明治後期油画基礎資料集成』(中央公論美術出版)。2005年『トンブソン教授のテンペラ画の実技』翻訳出版(三好企画)。2014年『絵画制作入門』(東京藝術大学出版会)。

展覧会:1970年東京藝術大学卒業制作展『透視肖像の圖』(東京藝術大学美術館蔵)。1973年安井賞候補展『透視群像の圖』(栃木県立美術館蔵)。1981年油絵大賞展『ぬい五歳像』(宮城県美術館蔵)。2014年東京藝術大学退任展『蔵王御釜』『那智二ノ滝』(宮城県美術館蔵)、『黄山北海』『那智ノ大滝』『二羽の剥製』(東京藝術大学美術館蔵)。2023年個展(佐々木美術館&人形館)。



絵画研究室

北折 整 教授 [副学長]

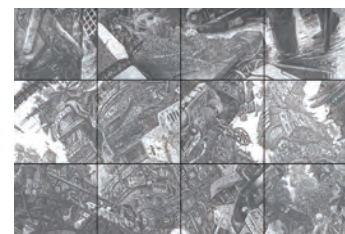
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
各人の主題に沿ってさまざまな描画材により制作し、表現力を高めます。



視覚デザイン研究室

三上 秀夫 教授 [美術学部長]

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
画面構成やイラストを通して描写力と構成力を身に付け、デザイン表現の幅を広げることを目的とします。



コンテンツデザイン研究室

森岡 淳 教授 [美術表現学科長]

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
人・モノ・場所を繋ぐ「コト」にフォーカスして、価値を創るためのデザインを学びます。



造形教育研究室

瀬戸 典彦 教授

San Diego State University, School of Art, Design, and Art History, Master of Fine Arts 課程修了
アートを成立させる理論的背景について学びます。



アニメ・映像研究室

鈴木 専 教授

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
アニメーションの作品制作を通して、思いを人に伝える難しさと面白さを体験し、「表現力」と「伝える力」を身に付けます。



情報デザイン研究室

鶴巻 史子 教授

多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了
九州大学大学院芸術工学府博士後期課程修了 博士(芸術工学)
複雑な情報をユーザーにわかりやすく効果的に伝達するための表現について学び、デザイン価値を創出します。



陶芸研究室

立花 布美子 准教授

東北生活文化大学生活美術学科(現 美術表現学科) 卒業
京都府立陶工高等技術専門学校陶磁器研究科修了
粘土、釉薬の特性を活かし、美的で機能的なデザインを考え、作品を制作する技能や表現力を身に付けます。



立体デザイン研究室

落合 里麻 准教授

東京学芸大学教育学部 G 類美術専攻卒業
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
さまざまな素材の加工や製作現場のリサーチなどを経験し、美しさと機能性を合わせ持つデザインの提案を行います。



染織研究室

佐々木 輝子 講師

東北生活文化大学生活美術学科(現 美術表現学科) 卒業
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
絞り染めや蠟けつ染め等の染色技法を習得し、卓上機や高機による織物製作を通して自身の制作に合った表現技法を探ります。



総合メディア研究室

伊勢 周平 講師

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了 博士(美術)
感覚、イメージが個々の表現に結びつくまで考え、実践します。



教育研究室

山口 刀也 講師

京都大学大学院教育学研究科修士課程修了
教育とは何か。古今東西の哲学や実践に学び、歴史に埋もれた子どもの姿と子育ての知恵を探り、考えます。

副手

学生生活や授業のサポート、事務から広報物のデザインまで、多種多様な職務を担い、美術学部を支えています。

- 川角 由 [彫刻・情報デザイン]
- 菅村 明生 [視覚デザイン]
- 寺澤 瑞貴 [人形]
- 中幡 優季 [陶芸]

- 東北生活文化大学 生活美術学科(現 美術表現学科) 卒業
- 東北生活文化大学 生活美術学科(現 美術表現学科) 卒業
- 東北生活文化大学 生活美術学科(現 美術表現学科) 卒業
- 東北生活文化大学 生活美術学科(現 美術表現学科) 卒業

O E U V R E

Graduation Works Exhibitions
2024

東北生活文化大学
美術学部 美術表現学科
第57回卒業制作展作品集
[ウーヴラ]

発行日

2025年3月15日

企画

鶴巻 史子

[東北生活文化大学 美術学部 美術表現学科]

デザイン

松井健太郎 [BLMU]

写真

村田 啓

対談インタビュー/編集

加藤 貴伸

発行

東北生活文化大学 美術学部 美術表現学科

美術学部連絡先

東北生活文化大学 美術学部 美術表現学科

〒981-8585 仙台市泉区虹の丘1-18-2

Tel/Fax: 022-272-7519

website: <https://www.mishima.ac.jp/tsb/>

入試に関するお問い合わせ

Tel: 022-272-7521(入試課)